様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６９６３

研究課題名（和文）ポスト個人化社会における人類学的家族研究の再構築：北欧型親族介護を事例に

研究課題名（英文）Reconstructing the anthropological study on families in a post-individualized society; A case study of the Nordic relative care support.

研究代表者
高橋　絵里香（Takahashi, Erika）

千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：９０７０６９１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：報告者は、フィンランドの高齢者を支える制度外親族介護実践について、3年間で計150日程度の実地調査を行ってきた。これらの調査から、介護関係に影響を与える様々な要因が浮かび上がってきた。具体的には、これまでのライフコース、住宅の所有状況、子世代における離婚・再婚の増加、公的な高齢者ケア制度とその民営化等が挙げられる。これらの要因は、ポスト個人化としてまとめることができるような家族形態の変化とも深く結びついており、制度外介護という実践として結実していると考えられる。
こうした調査結果について国際学会での発表を計6回行い、プロシーディングスに掲載された他、論集への分担執筆においても調査結果を記述した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
報告者の研究は、いわゆる「北欧型」と呼ばれる大きな福祉国家における家族のケア役割に着目することで、国家が福祉を担う状況において家族の役割はどのように変遷していくのかを問うものである。家族介護は日本においても日常的で身近な「問題」である一方で、行政や民間のケアサービスの利用は年々増加している。こうした状況において、公私の役割分担についての先例を知ることは意義があるだろう。また、日本においては娘や妻が介護役割を中心的に担ってきたのに対して、報告者の事例は、家父長制度やジェンダー規範に縛られない、より流動的な親族・家族の介護の在り様を模索する契機となるものである。

研究成果の概要（英文）：The grand total of my field research on the relative care practice outside of the municipal support in Finland has been 150 days within 3 years of the subsidy. From this field work, the various factors affecting the caring relationship of senior citizens have been outlined. For example, the life course of senior citizens, their housing history, the increase of divorce and re-marriage among children's generation, the public eldercare system and its privatization are included to those factors. These factors are connected to the change of family structure summarized as post-individualization and result in the practice of the relative care practice outside of the public care system.
With these results, I presented papers at international conferences for six times and wrote a chapter to an edited volume.

研究分野：文化人類学

キーワード：家族介護　フィンランド　親族研究　個人化

１．研究開始当初の背景

これまで大きな国家による社会福祉制度は、家族の機能を代替する役割を果たしていると考えられてきた。「伝統的」な社会においては家族が担ってきた養育・介護といった役割は、「近代的」な福祉国家の成立によって制度に委譲されるからだ。実際、北欧型福祉国家として知られるフィンランドでは、1970 年に子供による親の扶養義務が法的に否定されている。こうした状況を、ベックを始めとする論者は家族の「個人化(individualization)」［Beck and Beck-Gernsheim 2002］としてとらえてきた。個人化が進めば、家族の集団としての恒久的な持続性が弱まり、個人が「主体的」な選択によって家族を形成することで、従来は持続的で画一的であった家族の形態や機能が多様化するという理解である。

だが、北欧型福祉国家においても、財政難と人手不足を背景に「親族介護者(omaishoitaja / närståendevårdare : fin/swe)」の存在が注目を浴び、支援制度が急速に整いつつある。これは親族介護者をケアワーカーに準じる存在として扱い、給与や休暇といった労働の保障を与えるという制度である。つまり、日本を含む保守主義的な社会において家族による介護は当たり前の行為とみなされているが、ひとたび義務から解放された社会においては、制度化しなければ介護へのインセンティブが働かないだろうという発想が背後に見出せる。その意味で、親族介護者支援制度は家族の個人化に抵抗し、再家族化を試みる国家政策の一環であるとみなせるだろう。

こうした状況を踏まえ、申請者は 2013 年からフィンランドの親族介護者支援制度についての人類学的研究を行ってきた。そこから明らかになってきたのは、親族介護の制度化と家族の在り様の複雑な関係である。高齢期家族は、親族介護の制度化を軸にすることで、① 制度に取り込まれ、行政によって登録された親族介護者と被介護者、② 制度に包摂されていないが、親族介護を行っている家族、③ 高齢者介護を完全に行政にゆだねた家族、に分類される。これまで申請者は①の領域に着目してきたが、親族介護者の認定過程調査からは、何らかのケアを行っていても様々な理由で親族介護者の申請を棄却されるケースがあること、親族介護者として認定される人物は一人であっても、その介護者をサポートする多様なネットワークが控えていることが判明した。つまり、公的な親族介護者支援制度の背後に、制度外の親族介護実践が広がっているのである。

【参考文献】

Beck, U and Beck-Gernsheim, E., 2002, *Individualization, Institutionalized Individualism and Its Social and Political Consequences.* Sage Publications.

２．研究の目的

報告者は、制度に包摂されていないが親族介護を行っている家族、および高齢者介護を完全に行政にゆだねた家族という二つの集団に着目することで、家族の制度的代替／家族への回帰という背反する流れが同時進行する中で、家族とはどのような意味と機能を持つ存在となるのか、その全体像を把握することを目的として研究を行ってきた。家族の多様な結びつきを制度外介護と重ね合わせて考えることで、家族の個人化と再家族化という二つの動きがせめぎ合う様態を捉えていくことをめざしてきた。

具体的には、フィンランド西南部の自治体に暮らす高齢者を中心的な調査対象とし、非専門職による制度外の介護実践を主題に、「家族の配列」を描き出すことを試みてきた。「家族の配列（configuration of family）」とは、画一的な核家族モデルではとらえきれないような、関係性（relatedness）や取り巻き方（entourage）に基づく流動的な関係全体の配列である［Jallinoja and Widmer (eds.) 2011］。ここでいう家族とは、法律や居住形態、血縁によって定義されるものではなく、隣人や友人まで包含し得るような当事者にとっての感じ方や実践の中から立ち現われる広いつながりを想定している。ただし、ヤリノヤらが研究対象地域の地理的環境や言語・歴史といった社会的背景から独立した個人的つながりのみに着目していたのに対し、報告者は家族の配列の地域的特性に着目してきた。これは、地域福祉は画一的なサブシステムではなく、ローカルな環境や歴史に適正化した形で展開していることが、これまでの申請者の研究から明らかになっているためである[高橋　2013]。

【参考文献】

Jallinoya, R and Widmer, E. (eds.), 2011, *Families and Kinship in Contemporary Europe: Rules and practices of Relatedness.* Palgrave and McMillan.

髙橋絵里香、2013、『老いを歩む人びと：高齢者の日常からみた福祉国家フィンランドの民族誌』勁草書房。

３．研究の方法

本研究は、フィンランド西南部の一自治体の住民を対象とした実地調査から、家族・親族構成、在住地域や接触頻度、広義のケア内容等に基づいて家族の配列を描き出した。スノーボール・サンプリングの方式を採用することで、できるだけ広範な対象にアプローチした。この調査から採取されたデータは主に 3 種に分類される。すなわち、①高齢者の家族史や親族関係の拡がり　②現在の高齢者とその家族の地理的配置、接触頻度、買い物や安否確認や生活に関わるアドバイスといった広義のケアの概要　③行政や第三セクターと家族・親族との間での分業体制の確立プロセス　である。

以上のような調査によって得られたデータをエスノグラフィックな記述にまとめた。そのうえで、高齢者を取り囲む家族の多様性とケア配置が、家族の個人化・再家族化を試みるマクロな動きとどのように連動しているのか分析し、多様な家族ネットワークが地域福祉という社会秩序の基礎を築いている様態を明らかにしてきた。

こうした実地調査を行う一方で、フィンランドの家族・親族形態の変遷について、現地の家族史や家族社会学、民俗学の文献を収集することで、歴史的な推移を明らかにしてきた。また、人びとの暮らしや日常実践の歴史的推移について、調査地において小規模出版されている資料を収集した。これらの文献と民族誌的調査結果を総合し、血縁・地縁関係に基づく伝統的な相互扶助と、個々人の関係性に基づく創意工夫としての介護関係、公的サービスから織りなされるケアの編成を記述・分析した。

４．研究成果

報告者は、助成対象となった計三年間で計 150 日程度にわたって、フィンランドの高齢者を支える制度外親族介護の進展状況を包括的に明らかにする実地調査を行ってきた。

高齢者が自身の暮らしを維持していく上で、自治体の提供する公共サービスの他にどのようなチャンネルを利用しているのか、そうした非公的なネットワークの形成に家族の形はどのように反映されているのか、といった問いを念頭においてインタビューを実施した。また、教会やボランティア組織といった高齢者を支える活動を行っている団体についても参与観察を実施した。さらに、医療福祉改革をにらんだ広域自治体内でのサービス規格の統一が進む中で、公的なケアサービスの民営化・効率化がどのように進行しているのかを検討してきた。こうしたフィールドワークを元に、現代社会において家族の個人化、すなわち家族の集団としての恒久的な持続性が弱まり、個人が「主体的」な選択によって家族を形成することで、従来は持続的で画一的であった家族の形態や機能の多様化が進んでいるという見解の妥当性を検討した。

これらの調査から、高齢者の介護関係に影響を与える様々な要因が浮かび上がってきた。具体的には、①これまでのライフコース、②子世代における離婚・再婚の増加、③住宅の所有状況、④公的な高齢者ケア制度とその民営化等が挙げられる。これらの要因は、ポスト個人化としてまとめることができるような家族形態の変化とも深く結びついており、制度外介護という実践として結実していると考えられる。そこから導き出されるのは、以下の 4 点である。

i）　現在地方部において高齢期を迎えている世代においてもライフコースは既に多様化していること、そこには戦争や移住とった経験が大きく影響していることが明らかになった。フィンランドでは戦前から女性の就業が一般的であり、どのようなキャリアを築いてきたのかということが、高齢者達の現在の自己認識や人間関係と大きく影響している。

ii）子世代における離婚や再婚の増加は、親世代が関係を維持する対象の増加と複雑化に繋がっている。高齢者達は感情的、関係的な距離に基づき、交流や手助けを求める相手を選び取っている。

iii）高齢者が在宅で暮らし続けるためには住宅を維持するための様々な「手入れ」が必要であり、そうした作業において家族が重要な役割を果たしている。また、人びとはかなり若い年代から家を賃貸ではなく購入し、頻繁に買い替えを行っていること、老年期には高齢者向け住宅への買い替えも頻繁に起こっていることがわかった。その結果として、不動産の子世代への相続がきわめて不確実で予想の難しいものとなっていることが明らかになった。こうした家の継承についての構造的な困難が、現在の家族・親族の介護実践にも影響を与えているのである。

iv）報告者の調査地では、この一年間で公的ケアサービスの民間委託が急速に進展している。こうした刻一刻と変わり続ける高齢者ケア制度についてのモニタリングも行ってきた。多国籍企業によって買収された高齢者向けの居住型介護施設の状況や、民間企業によって開発されたケアワーク管理プログラムの公的な訪問介護サービスの導入によって、親族・家族と民間企業という二つの私的領域が同時に拡大しつつある。

こうした調査結果について国際学会での発表を計 6 回行い、プロシーディングスへ掲載された。また、人類学的再分配研究をテーマとする論集において、調査地の緊急通報システムを題材として、高齢者ケアをめぐる公私の配分が変化しつつある状況を分析した。

報告者の研究は、いわゆる「北欧型」と呼ばれる大きな福祉国家における家族のケア役割に着目することで、国家が福祉を担う状況において家族の役割はどのように変遷していくのかを問うものである。家族介護は日本においても日常的で身近な「問題」である一方で、行政や民間のケアサービスの利用は年々増加している。こうした状況において、公私の役割分担についての先例を知ることは意義があるだろう。また、日本においては娘や妻が介護役割を中心的に担ってきたのに対して、報告者の事例は、家父長制度やジェンダー規範に縛られない、より流動的な親族・家族の介護の在り様を模索する契機となるものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① Erika Takahashi, "Publicly Privatized: Interpreting the relative care support services in Finland and the neoliberal reform of Nordic welfare states." *Conference Proceedings Anais 18th IUAES World Congress.* pp. 1844-1849, 2018. ［査読あり］

② 内堀基光、高橋絵里香「AAGE 第 10 回研究大会報告」『文化人類学』82(4): 574-577、2018 年［査読あり］
DOI: https://doi.org/10.14890/jjcanth.82.4_574

③ 高橋絵里香「国際人類学民族科学連合中間会議 2016 報告」『文化人類学』81(4): 708-713、2017 年［査読あり］
DOI: https://doi.org/10.14890/jjcanth.81.4_708

④ 高橋絵里香「フィンランドの高齢者ケア政策と老いのかたち」『作業療法ジャーナル』50(12): 1312-1315、2016 年［査読なし］

〔学会発表〕計（9）件　／うち招待講演　計（1）件／うち国際学会　計（6）件

① Erika Takahashi, “Publicly Privatized: Interpreting the relative care support services in Finland and the neoliberal reform of Nordic welfare states.” 18th IUAES World Congress. July 19th, 2018, Florianópolis (Brazil).

② 高橋絵里香「福祉国家と天気：高齢者ケアからみた人類学的風土論にむけて」日本文化人類学会第５２回研究大会、2018 年 6 月 3 日、弘前大学（青森）。

③ Erika Takahashi, “Generations, Social Order and Old Age.” At Conference for the Association of Anthropology, Gerontology and the Life Course. June 9th, 2017.

④ 高橋絵里香、「最適化されたケア—北欧型福祉国家と組織・顧客・民営化」、日本文化人類学会　第５１回研究大会、2017。

⑤ Erika Takahashi, “The logic of ‘optimized’ care: The rise of ‘a citizen-consumer’ in Finnish eldercare services. Colloguium: Thinking about an anthropology of care, December 9th, 2017, Osaka(Japan). ［招待講演］

⑥ Erika Takahashi, “The Meaning of ‘Emergency’: The transformation of the safety phone system in Finland under the Neoliberal Reform.” 2016 annual conference for Nordic Sociological Association. August 12th, Helsinki (Finland).

⑦ Erika Takahashi, "Professionally related: the consequence of re-establishing informal care in rural Finland." EASA (European Association of Social Anthropologists) 2016 biennial conference. July 20th 2016, Milan (Italy).

⑧ 高橋絵里香「連帯とボタン：緊急通報システムにみる福祉国家への応答と配慮」第 50 回日本文化人類学会、2016 年 5 月 29 日、南山大学（愛知）。

⑨ Erika Takahashi, "Redefining the boundary between care/work: the rise of the relative care support in Finland." IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) inter-congress. May 7th, 2016, Dubrovnik (Croatia).

〔図　書〕　計（2）件

① 髙橋絵里香「誰がボタンを押すのか――フィンランドの緊急通報システムにみる要求／提供のダイナミクス」『再分配のエスノグラフィー――経済・統治・社会的なもの』浜田明範(編)、裕書館、2019。

ISBN: 978-4865820362

② 髙橋絵里香「先住民と言語的少数派―フィンランドのサーミとスウェーデン語話者」『先住民から見る現代世界―わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』深山直子、丸山淳子、木村真希子（編)、昭和堂、2018：288（213-217)。

ISBN：978-4-8122-1640-8

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。